



回廊の闘い（帝国暦四八四年六月）

（一）

帝国暦四八四年六月。

幼年学校で起こった不可解な殺人事件を解決したラインハルトは再びイゼルローンへと赴いている。

イゼルローンにおける新たな任務は、重巡航艦『ノルデンVII』の艦長である。この時、ラインハルトの階級は大佐であり、大事に至らぬ前に殺人事件を解決に導いた功績に鑑みて、帝国軍の一部には戦艦の艦長へ推挙する動きもなしとはしなかった。

だが、あくまで一部だった。

「一七歳の若者に大佐の階級すらあるに、戦艦艦長を任せたことは、帝国五〇〇年の歴史をひもといてもただの一例も存在しない」

前例か…噂を漏れ聞いたラインハルトはキルヒアイスの前で苦々しげに吐き捨てた。彼らがあがめ奉る前例とやらも、それが作られたときには前例など存在しなかった。前例がなければやってはならないと言うのであれば、彼の『偉大なルドルフ』による篡奪も、『慣例によって禁じられていた』はずの国家元首と首相の兼務によって果たされたのではなかったか。前例の墨守のみが美德として賞賛されるならば、帝国そのものが途方もない悪徳の産物ということになるではないか。

視界スクリーンの中央、恒星アルテナからの光をリング状に背負って黒々とした存在感を主張しているイゼルローンから、ライン

ハルトは視線を離した。

「そうだろう、キルヒアイス？」

「イゼルローン回廊では重巡航艦が最も扱いやすい艦種だとおっしゃったのはラインハルト様だったはずですが……？」

金髪の若者から同意を求められ、キルヒアイスは穏やかにその鋭鋒をかわした。

キルヒアイスはこの時、大尉である。三年間に五階級を駆け上がったラインハルトには及ばぬものの、すでに三つの階梯を登り終えている。准尉として任官後、普通なら通過には絶望的な努力と幸運を要するはずの士官への関門も、彼にとっては開け放たれた扉と大した違いはなかった。

「ああ」

昂然とラインハルトは頷く。

「イゼルローン回廊は狭い。少なくともこういう戦場では火力と機動力のある艦の方が戦いやすいのは自明の理だ」

「では、取り敢えず、お望みはかなったわけですね。ご不満ですか」「不満はない。いずれ将官になれば、いやでも戦艦に乗ることになるからな。いまは軍務省の骨董連中に預けておくさ」

ラインハルトは、戦艦の艦長職に単なる通過点としての価値しか認めていない。たとえ、帝国軍士官の大半、特に艦隊勤務者にとって経歴の上での一つのゴールと信じられていようと、だ。

「ただ、戦場が回廊以外に設定された場合、必ずしも巡航艦がベストだとは言えなくなる」

「地球の古い諺にこういう言葉があるそうですよ、ラインハルト様。優れた芸術家はどんな絵筆でも優れた絵を描くことができる、と」

「おい、キルヒアイス」

白い、しかし、強靱な力を秘めた手が伸びて、ルビーを思わせ

る深紅の髪を指先に絡め取った。

ぐいと、やや乱暴に引っ張られたが、その程度のことではキルヒアイスが僅かも姿勢を崩すことはなかった。

転じた視線の先は、ほとんど悪戯っぽいと言っているほどの笑顔だった。

「そいつは間違ってる。そいつが本当に言いたかったのは、天才はどんな道具でも使いこなせるが、より良い道具を与えられればますます良いものが描ける、ということだ」

「では、与えられた道具ぐらい使いこなせなかったら、本当に物笑いの種ですね」

「それはそうだ。せいぜい気を付けることにしよう」

それがイゼルローン入港の前日である。

要塞に着任したラインハルトは、グロルマンという名の准将が指揮する一〇〇隻ほどのグループに所属することになった。制式には細かな部隊番号が付けられていたが、面倒なせいかグロルマンカンフ・グループと通称されていた。

着任の挨拶に訪れたラインハルトに対するグロルマン准将の反応は、ラインハルトのさして長くもない軍での経験の中でも特に珍しくも独創的なものでもなかった。強い髭で下顎の大半を覆った、今年五三歳になるという中年の准将は、自分よりも三〇歳以上年下の少年が階級では一つしか違わないという事実を自分に納得させかねたようだった。書類と、目の前に佇立した金髪の少年……というよりすでに若者と呼んでいい年齢にさしかかっているラインハルトだったが……との間で視線を往復させながら、グロルマン准将はな

かなか沈黙の帳を払おうとしなかった。

敬礼の後、直立不動の姿勢をとったままのラインハルトに、“休め”とも言わず、グロルマン准将は右手を挙げて副官を呼び寄せた。歩み寄った副官が准将の口元に耳を寄せ、頷いて、准将になにごとかをささやき返すのに、ラインハルトは完全に感情を消した蒼氷色の瞳を据えたままだった。

“グリューネワルト”、“陛下”、あるいは“幼年学校”等の単語が、微かな空気の漣となってラインハルトの聴覚にたどり着く。新しい彼の上官もまた、宮廷や高級軍人に間でささやかれている好奇の噂を愛好するタイプであるらしかった。

「よろしい、休み給え、ミューゼル大佐」

軍人以外の職業が考えにくい、気むずかしげな表情を崩そうともせず、准将は初めてラインハルトに声をかけた。

「着任を歓迎する」

「恐れ入ります」

個性の色を完全に消し去った口調でラインハルトも応じる。最初の一瞥以上の観察が、この上官の個性や軍人としての力量を推し量るために必要だとは到底思えなかった。

なかなかないものだな。志を共にできるだけの器量と才能を持った人物というものは――

謹直きわまりない態度をわずかも崩すことなく、ラインハルトの内心は不遜この上もない。

准将以上の階級でこの男を使うことになる……ことはまずないな。少将以上の地位を得ても、本人と、なにより部下が不幸になるだけだ――

ラインハルトの人材評価は苛烈の一言に尽きる。彼の覇業に役に立つか、立たないか、あるいは邪魔になるか。それだけである。

彼は急がねばならず、短時間にできるだけ多くの“役に立つ”人材を集め、そうでない人間を排除しなければならなかった。人材を評価する上での斟酌などおおよそ無用のことだったのである。

目の前の若者が自分を物のように採点評価しているなどとは夢にも思わず、グロルマン准将はラインハルトに無遠慮な目踏みの視線を投げつけた。

「昨年は、単艦で同盟領深くに分け入ったと聞いている。若さに似合わず大したものだ」

「幸いにして任務の完遂に成功いたしました。すべては皇帝陛下のご威光の賜と存じております」

「うむ。皇帝陛下の御稜威^{みいつ}はもとより、卿自身にも任務を達成するだけの器量があったということだろう。無論、それなりの運もな。運の良さは、戦場では時に最大の勝因ともなり得ると私は信じている。運の良い男が一人でも多く麾下にいてくれることはすなわち、我が戦隊がより多くの武運に恵まれることを意味するのだからな。その意味でも卿の着任を大いに歓迎する」

愚かなことを……内心でラインハルトは吐き捨てている。戦場での運を無用のものとは彼も思わない。だが、最初から運だけに頼り切って、勝利に向けてなすべき総てのことをなさないので、勝利の女神も微笑みを出し惜しみしようというものではないか。

無論、内心の罵声をそのまま言語に表現してしまうほど、ラインハルトは軽率ではない。

「では、早速だが任務に就いてもらう。卿の任務はブルク中佐から伝えてもらう。中佐には私から言っておく。中佐はブリッジにいるはずだ。直ぐに行き給え」

☆☆☆

グロルマン准将の主席幕僚であるブルク中佐から示された任務は、ラインハルトにとつては特に困難を覚えるものではなかった。曰く、遅くとも八月初旬までに、同盟領に属するヴァンフリート星系までを打通し、連絡線を確保すること。その目的の元に、要塞から同盟側回廊出口宙域の制宙権を奪回すること。参加兵力はグロルマン戦^{カンフ・ツルツベ}闘グループを初めとする一〇数個の戦闘グループ約四五〇〇隻。新任の駐留艦隊司令官ハンス・ディートリヒ・フォン・ゼークト大將自らが全般指揮に当たる。

「なぜ、ヴァンフリート星系なのだ？」

聞き慣れないというよりも意外な地名に、ラインハルトは反問せずにはいられなかった。

帝国軍の勢力圏は回廊から、同盟側出口にまで及ぶ。惑星カプチュランカを初めとして、ティアマト、ダゴン、アスターテ、アルレスハイムなどの星系が過去一五〇年近くの間、両国に無数の戦場を提供し続けているのだ。

ヴァンフリート星系は、これらの回廊出口の周辺星系よりも、僅かに同盟領の内側に位置する。先年、エル・ファシル星系への侵攻作戦が試みられた時も、ヴァンフリート星系外縁部に一時的な補給基地が設置されている。ただし、その位置は機密とされ、大佐となった今でもラインハルトには知らされていない。

「昨年の攻勢に際し、叛乱軍はティアマトから要塞至近にかけての哨戒線の構築に成功しています」

第五次イゼルローン要塞攻防戦のことを、ブルク中佐は口にした。

「今回の作戦は、これらの哨戒線を破壊し、制宙権を奪回することにあります。昨年の攻撃失敗で、叛徒どもの前線兵力は大きく落ち

込んでおり、戦線を従前に回復する好機であると考えられるからです」

「貴官はまだわたしの質問に答えていない」

ラインハルトの口調が鋭さを増した。

「なぜ、ヴァンフリートなのだ？ それであればティアマトからダゴンのラインで十分だ。ヴァンフリートでは叛徒どもの領域に踏み込みすぎ、前線を維持し切れない」

「これは、要塞駐留艦隊司令長官閣下からの作戦命令です」

ブルク中佐の応答は、ラインハルトの予測から一步も踏み出すものではなかった。

「後から加わったミューゼル大佐に、今更異を唱えられてもおいそれと変更できるものではありません」

「変更を要求しているわけではない。ヴァンフリート星系までの打通にこだわる理由を聞きたいと言っている」

「知って、どうなさるのです？」

「一言で『打通』と言っても、実行においては様々な選択肢がある」叩きつけるような返答だった。語気の激しさに拍たれて、ブルグが一瞬上体をのけぞらせたようにさえ見えた。

「総司令部の意図を、実施部隊が十全に理解していないければ、戦術上の選択肢が著しく狭まる。結果として、戦術的な勝利が得られても、戦略的にはむしろ齟齬を来す結果に終わることもあり得る。だから、ヴァンフリート星系でなければならぬ理由を知りたいのだ」

ヴァンフリートがティアマトであり、ダゴンであったとしても本質は何も変わらない……ラインハルトはそう思う。回廊出口周辺地域の支配権を一つや二つ、奪ったところで、帝国にとって何らかの政治的・戦略的課題が解決されるわけではないのだ。もっともらし

く戦略だの、戦術だのと唱えているが、こいつらは戦争ごっこをやっているに過ぎない。それも莫大な流血と、膨大な資財の浪費を代償として。

ブルク中佐の顎は縦には動かなかった。

「それはできません。作戦の目的開示はグルマン准将と、その幕僚団までに限定される旨、決定されているのです。今更、変えられるものではありません」

卿は、戦場で敵艦を前にして同じせりふを吐けるか。敵艦の砲口を目のあたりにし、応射を要求する砲術士に向かって、『反撃先は別の敵艦に決まっています。何もかもがすでにすっかり決まっているものを、今更、変えられるものではありません』と……罵倒しかけ、ラインハルトは目に見えぬ手に肩を押さえられた気がした。口元から飛び出しかけた罵声を間一髪、咽喉の奥へ引き戻し、代わりに不同意のしるしに大きく息をついてみせた。

戦理上の合理性に基づく批判の槍を投げつければ、反論に窮したブルク中佐は応じるに権威の盾をもってするに違いない。いわく、グルマン准将の決定、あるいはゼークト司令長官による裁可。

分かった。容れられぬとあれば、それは単なる命令に対する反抗としてしか受け取られないからな。無用に諍いを起こすのは止めておくさ――

自制を求めた目に見えぬ手の所有者に、ラインハルトは胸の裡だけで嘔き返す。口に出しては、しぶしぶながらも命令を受領した旨を応答し、さらに追撃範囲についての意見は記録しておいて欲しいと付け加える。

「追撃の可能な局面に際しては、最大警戒ラインまでの追撃判断を許可してもらいたい。これなら、別に駐留艦隊司令長官の裁可の範囲からはみ出すものではあるまい」

「無論、戦いには勢いというものがあることは理解しております。追撃が、予め定められたポイントで必ず停止できるわけでもありませんまいし、無理に止まろうとすれば敵に乗ぜられることもなしとしますまい」

いやみたらしい長広舌を、ラインハルトは氷の鞭に似た口調で遮った。

「命令を無視してまで追撃を行った挙げ句に敗北の憂き目を見れば、皇帝陛下よりのご命令を蔑ろにし、無用に兵と艦を損ねた責は負わねばならない。その程度のことは心得ている」

「若くして赫赫たる軍歴をお持ちのミューゼル大佐ですからね。小官ごときの念押しは不要でありましょう」

ブルク中佐はラインハルトの発言を記録し、詳細な命令を収めた暗号チップを手渡した。声にも表情にも彼に対する負の感情を漂わせていたが、ラインハルトはさして気にもしない。幼年学校入学以来、ラインハルトは彼を取り巻く嫉視と憎悪の藪の中を切り開いて人生の歩みを続けてきた。たった一人、赤毛の親友の力だけを頼りにして。今更、一介の中佐の無礼なあしらいごときは、記憶の隅にひっかけるだけの価値もありはしなかったのである。

こうして、帝国暦四八四年六月から七月にかけて、グルルマン戦^{カンフ・グルツベ}闘グループを含むイゼルローン要塞駐留艦隊は活発な機動作戦を展開する。五〇隻から、最大三〇〇隻ほどの、戦艦を含む戦闘グループが互いに連携しつつ、イゼルローン回廊中に築かれた同盟の哨戒・補給線を破壊し、哨戒部隊を駆逐していくのである。動員された兵力は、駐留艦隊のほぼ三分の一に相当する四〇〇〇隻強に達

した。

一方、前年の第五次イゼルローン要塞攻防戦に敗れた同盟軍は、まだ前線の再編成途上だった。当然、イゼルローン回廊中に建設した中継線維持のために大きな兵力を前線に送り込める状態ではなかったから、これらの戦いは帝国軍のやや一方的な戦闘に終始した。約二ヶ月の間に大小一〇数回の中小規模の戦闘が行われ、ラインハルトも『ノルデンVII』を指揮してそのすべての戦闘に参加した。一連の戦いをラインハルトが楽しまなかったと言えば嘘になる。戦いに臨む緊張が心身を極度に活性化させ、戦場を見渡す視界を冴え渡らせる感覚は、彼が最も好むところだったし、懐疑的な反戦主義はラインハルトにとって無縁のものでしかなかった。さらに、彼は頂点への道をできる限り早く極めねばならず、そのためにはより短期間に、より多くの戦果を上げていかねばならなかった。戦いに懐疑を抱くときが、いずれ訪れるかも知れないにしても、それは今ではなかった。

イゼルローン回廊におけるラインハルトの操艦は、操艦術としても洗練の粋を極めたものであると同時に、重巡航艦の特性を最大限度に生かしたものだ。『ノルデンVII』に立ち向かった同盟軍艦艇は、驚くほど機敏で高速の機動に翻弄され、無理な転針で速度が鈍ったところを狙い撃たれた。あるいは、『ノルデンVII』の僚艦に内懐に飛び込まれ、至近距離から宙宙を叩き込まれて轟沈の憂き目を見たのである。ラインハルト個人の戦果は無論のこと、グルルマン戦闘グループ全体がラインハルトの主導下に傑出した戦果を上げていったのは当然の結末だった。

この間、『ノルデンVII』の上げた戦果は、単独で巡航艦三隻と駆逐艦二隻の撃沈、僚艦と共同しては旧式戦艦一隻完全破壊を含む一〇数隻の撃破など華々しいもので、当初、『一七歳の大佐様かよ』

と白眼視していた『ノルデンⅦ』搭乗員たちの評価も一変するに至った。だけでなく、ラインハルトに窮地を救われる機会が増えるに連れ、グロルマン戦闘グループの搭乗員たちもまた、ラインハルトを指して『顔と腕が一致した、それもハイ・レベルでの稀少例』と評するようになっていたのである。

「我らが金髪の坊や、万歳」

黒ビールのジョッキを打ち合わせながら叫ぶ声は、まだ数は少なく、声も大きくはなかったから、作戦を統べるゼークト大将にまでラインハルト個人の名がとどくことはほとんどない。ゼークト大将も、グリューネワルト伯爵夫人の弟が要塞に配備され、グロルマン准将の部隊に配属されたことは知っている。しかし、それだけのことである。ゼークトの指揮に服する士官の中で、大佐だけでも軽く一〇〇〇人を超える。一介の大佐の動向ごときは、人事上の事実を超えるものではあり得なかった。

とは言え、グロルマン戦闘グループの動きは、作戦指揮官としてのゼークトの注意を惹くには十分なものだった。他の戦闘グループに比較して、味方の最小限の損失で、突出して大きな戦果を上げているのだから、これは当然のことと言えた。特に今次の作戦は三つのステップが用意されており、その第二段階以降には特に優れた戦術能力を有する部隊を配する必要があった。

ゼークト大将が、自身の選択を具体化したのは八月初旬のことである。

彼は情報先任参謀を呼び、こう命じた。

「グロルマンの部隊の動きが傑出して良い。候補の部隊として加えておけ」